

日本の一般地域住民を対象としたコーヒー摂取頻度と全死因死亡

リスクの関連：自治医大コホート

埼玉県立大学大学院 保健医療福祉学研究科 博士論文

指導教員 中谷直樹教授・濱口豊太教授・滑川道人教授 2020年3月

学籍番号 1891002 氏名 坂巻つや子

日本の一般地域住民を対象とした前向きコホート研究により、コーヒー摂取頻度と全死因死亡及び死因別死亡（がん死亡、心疾患死亡、脳血管疾患死亡）リスクとの関連を明らかにすることを目的とした。本研究ではコーヒー摂取頻度が増加することにより循環器系疾患死亡リスク、がん死亡リスク、さらには全死因死亡リスクの低下が示されるという仮説を検証した。

日本の一般地域住民を対象とした平均18年間の追跡調査を含む前向きコホート調査（自治医科大学コホート研究）のデータを利用した。ベースライン時に循環器疾患既往またはがん既往がある者、及びコーヒー摂取頻度に関するデータが欠落している者を除外した9,946人の対象者（3,870人の男性、6,076人の女性）を分析対象とした。コーヒー摂取量（食事摂取頻度調査票：FFQ）は5つの下位尺度のいずれかを選択した；「なし」「1日1杯未満」「1日1-2杯」「1日3-4杯」「1日5杯以上」。2015年までの死因を含む死亡の追跡は、保健所にて死亡小票を閲覧することにより把握した。

平均18.4年の追跡期間中、全死因死亡者数は2,024例（男性1,114例、女性910例）であった。男女合計について見ると、性・年齢及び交絡要因を補正した相対危険度（95%信頼区間）は、コーヒーを飲まない者を基準（HR=1.00）とした時、1日1杯未満者は0.93（0.84 - 1.04）、1日1-2杯者で0.93（0.82 - 1.05）、1日3-4杯者で0.87（0.71 - 1.07）、1日5杯以上者で1.06（0.83-1.36）であり、いずれも統計学的に有意な関連は示されなかった。一方、脳血管疾患死亡リスクにおいて、性・年齢及び交絡要因を補正した相対危険度（95%信頼区間）は、コーヒーを飲まない者を基準（HR=1.00）とした時、1日1-2杯者の相対危険度（95%信頼区間）は0.63（0.42 - 0.95）で、統計学的に有意に脳血管疾患死亡リスクが低くなった。また、1日5杯以上者で0.85（0.37-1.96）でリスクは低かったものの有意なリスク低下は示されな

った。また、虚血性心疾患死亡やがん死亡に関しては両者の統計学的に有意な関連は示されなかった。

日本の一般地域住民を対象とした前向きコホート研究結果から、コーヒー摂取頻度と全死因死亡リスクの間には統計学的に有意な関連は示されなかった、一方、死因別に見ると、コーヒー摂取頻度と脳血管疾患死亡リスクの関連はU字型の関連を示し、コーヒーを飲まない者を基準とした時、1日1-2杯摂取者では37%脳血管疾患死亡リスクが低くなった。今後、コーヒーの少摂取頻度により脳血管疾患死亡リスクを低下するメカニズムを解明し、コーヒー摂取による脳血管疾患死亡リスクの低下に向けた介入可能性を検討する必要がある。